

REGARDS SUR MAI '68 KAN EGUCHI

五月革命の考察

日本現代革命への教訓

江口 幹



麦社

目次

はじめに……5

第一章 初まりとしての五月……7

第二章 教育の告発と“学ぶ”ことの革命性……19

第三章 大衆としての意識的少数者……36

第四章 管理社会への反乱……52

第五章 自治管理への出発……69

第六章 来るべき革命の戦略……87

〔付〕 性の解放と社会革命……98

あとがき……116

目次

第一章	革命の意義と革命の目的	1
第二章	革命の歴史	10
第三章	革命の理論	20
第四章	革命の實踐	30
第五章	革命の未来	40

はじめに

私は、何か結論を下すためにはなく、経験を汲み取るための一つの討議資料として、五月革命についての小著を書いた。そうした作業をするについては、幾多の理由から私が不適格であることは十分承知しているけれども、しかし反面、私に全く資格がないわけでもあるまい、とも感じてゐる。第一に私は、人間を差別し支配することごく少数の人々が特権を享受している社会を変革したいと望んでいる、何一つ特権を持ちえない、抑圧を受けている大衆の一員であり、しかも、五月革命の中にはその変革のための貴重な教訓が含まれている、と考えているものであって、来るべき社会が、それを構成する各個人の自由な意思交換の上に成立するものならば、新しい社会を迎えるために、そこに加わる一人として、たとえ未熟であろうと、私にもやはり発言する権利はあるからである。第二に私は、五月革命はあまりにも語られていないと痛感しているからである。五月については、多くがいわれた、すでにすべてがのべられた、という風に一般には受け取られているけれども、私には決してそうは思われない。五月革命直後の、十分に資料も整わない時期に書かれた感想文を除けば、わが国では本格的にはほとんど顧みられていないのであり、夥しい言葉が語られたの

はフランスにおいてであって、その余波を受けて、わが国にも多くの翻訳ができたことは事実だが、それがフランス人の書いたものであり、翻訳である限り、五月の経験は日本人の思想としては結実していないのであって、あの豊かな経験はわれわれ自身のものではないのである。第三に、六八年五月は、絶対自由主義的な傾向——各個人の自由な発意と合意とに立脚して根底的な変革をはかるうとする思想傾向の持主でなければ、十分には理解しがたい、当惑させられる性質のものであるが、私は当惑することなくあの激動を直視できるからである。

それらを考慮して、何よりも魅惑にとらえられて、適任ではないと承知しつつも、私は五月革命について気づいたことを書きとめることにした。しかし、この小著には、当然扱うべくして扱っていない幾つかの欠落がある。たとえば、フランスの経済構造、左翼諸党および各労働組合の体制内的な機能の分析、革命的イデオロギー集団の役割の明確化、などであるが、それらについては機会を改めていずれ論じてみたい、と考えている。要するに、この小著は、五月革命の経験をわれわれのものとするための一つの出発点にすぎず、それ以上のものではない。そうしたものとして、日本における社会変革のための行動に資するよう、利用していただければ幸いである。

なお、この小著は、私を報告者とする五月革命についての研究会の過程から生れたもので、その意味では共同作業の所産であり、私は、研究会に参加された人々のご協力に深く感謝しておきたい。

第一章 初まりとしての五月

フランスにおける六八年五月の諸経験が、われわれ被抑圧者大衆のとるべき行動にどのような問題を提起しているのか、そうした視点から以下の各章で五月革命にいくつかの照明を当ててみることにしたいが、この章では、最少限必要な前提としての事実の経過と、五月革命の意義とを概観してみることとする。

五月革命は、大別すれば、三つの時期に分かれる。

第一は、五月三日から十三日の時期であって、これは、学生が運動の主軸となっていた時期である。

第二は、五月十四日から二十七日の時期であって、これは、ナントのシュダアヴィアション工場に端を発した労働者のストライキが全フランスに波及してゆく時期である。

第三は、五月二十八日以降であるが、厳密に言えば、二十八、二十九兩日の政治的空白期と、三十日以降に分けられるもので、これは、政治的収拾の時期、支配層の態勢立て直しの時期である。

この三つの区分にしたがって、事実経過を簡単に振り返ってみたいが、第一期について語る前

に、この時期の事実を十分理解するためにも、その前期についてのべる必要があるだろう。

周知のように、五月革命は、パリ大学のナンテール分校に端を発している。しかし、大学教育の問題が社会への全面的な異議申し立てに発展する下地は、ナンテールだけではなくて、フランス各地の大学でかなり以前からうかがわれた。五月革命の一つの契機を作ったものとして有名になった、ストラスブール大学の情況主義者インターナショナルのメンバーによる、「学生の情況の悲惨について」というパンフレットは、六六年十一月にでているし、ナンテールでは、六七年十一月にストが行なわれるなど、前兆はいくつかあげることができる。しかし、五月革命の直接の契機は、六八年三月二十二日の、三月二十二日運動の形成から生みだされた。

三月十八日の午前三時頃、パリのマンハッタン銀行でプラスチック爆弾が爆発した。それから程なく、今度はアメリカ銀行の鉄のブラインドが吹き飛ばされた。いずれもアメリカ系の施設を狙ったもので、ベトナム反戦の意思表示とみられたが、犯人は不明であった。パリでプラスチック爆弾が乱れとど無秩序は許しをたいとする大統領ド・ゴールは、厳命を出して、その夜から警察の厳しいパトロールが行なわれはじめた。

そして、ベトナム反戦委員会によって組織された反米デモが行なわれた三月二十日の夕方、更にアメリカン・エクスプレスのジョーウインダーが爆破された。容疑者として、その夜から翌朝にかけて、高校生を含む六人の学生が逮捕されたが、主としてベトナム反戦委員会のメンバーであった。三月二十二日、ベトナム反戦委員会は、これを挑発であり、謀略であると声明する。

事実、それは謀略であったとみられているが、その「脅迫的謀略に対してどのような態度をとるか討議するための集会」が、ダニエル・コーン・ペンディットなどの呼びかけで、二十二日の夕方からナンテール分校で開かれる。六〇〇名ないし七〇〇名といわれる学生が呼びかけに応じて集まり、抗議の意思表示として分校本部の占拠を決議する。その夜、分校本部は一四二名と伝えられる学生によって占拠される。これが三月二十二日運動と呼ばれる組織体の結成となる、最初の行動であった。分校本部の占拠は、翌二十三日の午前二時に終了するが、一週間後の二十九日に集会を開くことが決定され、反帝国主義闘争を軸として運動は継続されることとなった。

三月二十二日運動のメンバーは、二十九日に予定される集会を前にして、宣伝パンフレットを作って、二十六日に学内に配布した。それは、反米デモでの逮捕に抗議するとともに、「資本主義と労働闘争」、「大学と批判大学」、「反帝国主義運動」などについて討論会を開く、というものであった。多くの学生たちはそれを学校当局に対する宣戦布告として受け取り、学園内には、いくつものグループが生まれて議論が各所で進められた。

予定されていた二十九日の集会に対し、分校当局は、二十九、三十の両日、学校を閉鎖することに対抗する。集会は二日延期されて、四月二日に行なわれることとなった。その二日の朝、ナンテール分校の一番大きい階段教室が、一二〇〇名の学生によって占拠される。そこで午前中一杯は討論が続けられ、午後になると参加学生は小グループに分かれて、教室を自由に選んで討論を重ねた。そして、この日以後、ナンテールでの運動は継続的なものとなり、学内での集会、討論のため

の教室占拠、講義や講演への質問攻め、試験ボイコットといった形の闘争が進められる。

一方、四月二十五日に、トゥールーズ大学では、左翼学生のベトナム反戦集会を右翼学生が襲撃して、流血事件が起き、翌二十六日には、ストラスブールで激しいデモが行なわれた。ナンテールではその二十六日、三月二十二日運動が、五月二日と三日をナンテール分校の反帝国主義の日とすることを決定する。

五月二日、ソルボンヌで右翼のオクシダン・グループによる放火事件が起きる。ナンテールでは、オクシダンの襲撃に備えて、ヘルメット、ゲバ棒、パチンコなどの装備による防衛体制がとられる。同時に、多くの教室が占拠され、授業が妨害された。これに対し、分校当局は、五月三日から分校を当分の間休校する旨の発表をする。そしてこの休校措置が、ナンテールでの火種を外部に拡大し、五月革命へと発展させることとなった。

五月三日、正午から、ソルボンヌでナンテール分校の閉鎖に抗議して集会が開かれる。数百名の学生が参加したが、午後四時すぎに警官が導入されて全員排除され、五二七人が逮捕される。しかし、それを見ていた一般学生約二千人が自然発生的に集団をつくり、抗議のデモを始める。そして、仲間の釈放を要求するデモ隊と警官隊との間で初めて衝突が起き、バリケードが築かれ、モロトフカクテルが飛び、午後九時ごろまで衝突が続いた。その夜、ソルボンヌもまたしばらく閉鎖されることが決定される。

五月四日、高等教職員組合は、抗議のためのゼネストを指令する。一方、フランス全学連(UN

EF)も、警察の弾圧に対し、反動ジャーナリズムに対し、ブルジョア大学に対し、逮捕学生の解放のために、五月六日を期してゼネストに入ることを提案する。

五月六日、パリ大学は、法学部と医学部の一部を除いてストに突入した。パリ市内の各高等学校も、朝からストに入るか、授業中の学内集会を行なった。またこの日は、UNEFの呼びかけた大デモンストレーションの日で、朝九時四五分頃からパリ市内の各所でデモ隊と警官隊との間で激しい衝突が繰り返され、翌日午前一時まで続いた肉弾戦の結果、六日全体で、学生側は数百名の負傷者、四二二名の逮捕者をだし、警察側は三四五名の負傷者をだした。

七日も、八日もデモは繰り返される。七日には六万人が、八日には六千人のデモが行なわれる。九日には、ソルボンヌの前、およびミチュアリテ会館で今後の行動が討議される。そして、五月革命にとって決定的な夜、五月十日から十一日にかけての、赤い夜あるいはバリケードの夜と呼ばれる一夜を迎えることとなる。

十日の午後五時半、フランス全学連と高等教職員組合の主催による集会がダンフェール・ロシュローで開かれる。そこから出発した二万あるいは三万人のデモ隊が、午後八時ごろにはカルチュ・ラタン一带を埋めつくす。そして、いつか自然発生的に、歩道の敷石をはがしてバリケードが作られ始める。ソルボンヌの周辺には約六〇のバリケードが築かれ、次第にその高さを増してゆく。警官隊とデモ隊との激しい衝突が予測され、それを避けようとして、学生代表と文部省当局との間で、事態の平和的解決についての交渉が進められた。しかし、午前二時、政府の命令でついにパリ

ケードに対する警官隊の突入が開始される。この突撃の決定が、五月革命の導火線であった。一面では陽気な、一面では苛烈なパリケードの夜の闘いは、午前五時ごろまで続いた。実際よりは本当は少ないと見られる、警察発表の負傷者は三六七名、逮捕者四六〇名、破壊された自動車は一八八台に達した。十一日の朝、警察を憎悪する声がパリ中に漲っていた、といわれる。

このパリケードの夜、この夜の残虐な弾圧が、事件を単に学生のものから労働者をも含めた広汎なものへと拡大する。十一日の午後、三大労働組合であるCGT、CFDT、FOは、十三日に二十四時間のゼネストとデモを行なって、弾圧に対して抗議すると発表した。このゼネストは予想外の成功を収め、六十万人といわれるデモがパリで組織され、またマルセイユでは五万、トゥールーズで四万、リヨンで三万五千、ナントで二万、レンヌで一万二千、カーンで一万などのデモが展開された。

十三日、パリのデモの先頭に立っていたのは、コーンリベンディットなどの学生代表であった。

そのことから象徴されるように、ここまでは、学生が運動を主導していたのである。しかし、十三日以後、情勢は急激に変貌する。十三日の巨大なデモは、学生たちを元気づけたが、同時に労働者をも勇気づけた。ゼネストに対する、政府側、経営者側の報復がなかったからで、ストは、公務員に關していえば違法であったが、政府や経営者はストを黙認せざるをえなかったのである。労働者たちは闘う自信をえた。

そして翌十四日、シュダヴィアション（南部航空機製造）工場で、工場占拠が行なわれる。労働

時間短縮の交渉に端を発していたが、若手労働者たちを主にして、工場内の管理事務所を占拠、工場長など管理職を軟禁状態にして、交渉が進められたのである。シュダヴィアションにつづいて、ルノーのクレオン工場が十五日に占拠される。これらにつづいて、雪崩れ式に、いわゆる山猫スト、組合の統制下でないストがフランス全土に波及してゆく。十七日には、パリ郊外にあるルノーのビャンクール工場が無期限ストに入り、工場占拠が行なわれる。フランス国営放送（ORTF）は、十七日に番組の自主編成に入る。この日、すべての郵便電話局がストに突入し、フランス国鉄とエール・フランスもストに入る。翌十八日にはパリの地下鉄、バスがストに突入、化繊の大工場であるリヨン・ロディアセタで工場占拠が行なわれる。

全国に波及したストは、五月二十日の段階では、六〇〇万から七〇〇万の労働者によって行なわれていた。鉄道、地下鉄、バス、航空機、郵便が止まり、国営放送も一部をのぞいて止まっていた。二十一日になると、ストは教育、繊維、百貨店、銀行などにも波及し、スト参加者は九百万に達する。二十二日には、ストは更に拡がって、サービス部門、中小企業、ガソリン・スタンド従業員、タクシーも加わる。こうして、五千万のフランス人口のうちの一千万人、フランス成年人口の五分の二がストに参加した。

この空前のゼネストの特徴は、労働組合指導部と何らかかわりなく、現場の労働者から自発的に発生したことであった。ストないしゼネストの指令は組合から発せられていなかったし、動機そのものも明確化することも難しい。しかし、ルシアン・リウーとルネ・バックマンによれば、共通す

る傾向として次のような発生過程が見られたという。「まず、現状改革を望む、組合員、非組合員合同のグループが生れる。次にこのグループの一人一人が職場内を説いてまわり、必要とあればお互いに納得するまで話し合う。業務を停止するところまでこぎつけると、はじめて職場集会を開き、ストが提案され、討論ののち無記名投票または挙手で採決する」。

これがゼネストの各单位組織で見られたものであった。それらの集積があの巨大な激浪を形成する。そして、このゼネストの渦中で、五月革命の初めの主役であった学生運動は、舞台の正面から一歩しりぞくこととなった。学生たちは、十三日にソルボンヌを占拠し、十五日にはパリのオデオン座を占拠し、それらを全面的な異議申し立てのための討論の場とする。そこでは、禁止することを厳禁するというスローガンの下に、資本主義について、教育について、文明について、性について、労働者の自治管理について、あらゆる事柄について、自由に限りない対話が繰りひろげられた。学生たちは、各種の行動委員会を作りはじめる。そして、十六日には、ソルボンヌの学生たちがルノーのビヤンクール工場まで行進するなどして、労働者階級に革命への決起を呼びかける。

しかし、学生と労働者の間には、一部を除いて、十分な連帯は生まれなかった。学生が革命的であったのに対して、労働者の大勢は、日常闘争の域をでなかった。五月革命の当初、学生たちを挑発者と呼んでいた労働組合指導部は、ストの盛り上りの中で方向転換をし、一応学生たちを支持する姿勢を見せながら、ストに対してはそれを統制しようとする姿勢をとることになる。そして、ストが続けられるにつれて、初めの自発性は労働者たちの間から失われ、ストに入った労働者の大多

数は、その解決を労働組合に委ねてしまふ。労働組合の指導部は、過激な学生と労働者との接触を怖れ、両者の交流を遮断することをばかり、問題を経済要求によって解決しようとする。その方向で、首相のボンビドーと、CGT、CFDT、CFTC、FO、CGCなどの各労働組合代表と、使用者側代表との交渉が二十五日に始まる。そして、二十七日に妥結したのが、いわゆるグルネル協定である。

この協定は、賃上げ十%などを主とするものだが、下部の労働者は受け入ることを拒否し、ストは続行される。しかし、六月に入ると、警官隊が工場を占拠し、各地の工場で労働を再開させるにいたる。したがって、この結果だけから見ると、一千万人ものストが行なわれたにもかかわらず、賃上げ一〇%という経済的な要求の充足だけで事は終ったことになる。

だが、そうしたゼネストの波が、政治的危機を生みだしたことは確かであった。それは特に、グルネル協定が下部から拒否された直後、五月二十八日、二十九日に頂点に達する。大統領ド・ゴールの退陣は、既定事実のようにさえ見えるようになる。左翼連合のミテランが、二十八日に左翼臨時政府を提唱する。二十九日に行なわれたフランス共産党、CGT主催のデモには五〇万人が参加し、人民政府を樹立せよ、というスローガンが叫ばれる。この日、統一社会党のピエール・マンデス・フランスは、談話を発表して政権担当の用意がある旨を声明する。

しかし、ド・ゴールの演出で事態は劇的に逆転する。二十九日、ド・ゴールは姿を消す。それは、初めは引退の前触れと思われたが、実はこの時、ド・ゴールは西ドイツへ飛び、そこに駐在し

ていたフランス軍首脳と会見し、支持をとりつけていたのである。三十日にド・ゴールは、国民議会を解散し、選挙を六月二十三日と六月三十日に行なうことを声明する。巨大な逆流が開始された。三十日の午後六時、ド・ゴール派は、ド・ゴール支持の大デモ、七〇万人とも八〇万人ともいわれる参加者をだした大デモを組織する。この日を境にして、体制側が攻勢をとることとなる。共産党、CGTは選挙を受け入れる。三十一日には、警察力によって郵便電話局で労働が再開され、六月四日から多くの企業で労働の再開が始まる。六月上旬以降も、たとえばORTFで建物の占拠が行なわれたり、労働再開を迫る警察力と労働者、あるいは労働者と連帯した学生との間で、たとえば六月六日のルノーのフラン工場での衝突などが見られるが、それらは事態収拾への急速な波の中では、例外にすぎなかった。そして、六月二三日、三〇日の選挙で、ド・ゴール派は圧勝した。したがって、フランスの体制を揺がすかに見えた五月革命は、結果的に見ると、これという大した成果もなしに敗北したことになる。

こうして、一応事実を追って五月革命を振り返ってみると、一見単なる社会的な暴発、一時的な騒乱であつたように見える。五月が達成したものはほとんどなかったともいえる。若干の大学改革への着手、ド・ゴール退陣への道を用意し、フランス経済に深刻な打撃を与えたが、支配関係にはほとんど影響を与えなかった。五月以後、五月を推進した勢力に対する抑圧は一層強化される。

それでは、五月は取るに足らないものであつたのか、私はそうではないと考える。五月の意義は、それが達成したところにではなく、それが予告したところにある、と思われるのである。五月

は、革命を達成しなかったが、革命的状况を生みだした。僅か二、三週間のうちに、資本主義を含めて、あらゆる既成の権威に対する異議申立てが、あらゆる部門で噴出した。それは、既成の支配体制の根底を深刻に揺がした。そして、五月は、革命は不可能であるといわれていた先進工業国における革命の可能性を告げるとともに、現代における革命の主題は何か、革命の主体は何か、どういう行動が真に革命的なものかを予告した、と考えられる。したがって、五月のデモ参加者たちが「これは初まりにすぎない」と叫んだように、五月革命は、単に「初まりにすぎない」弱さとともに、まさしく「初まり」であることの意義と栄光とを備えていた、出発点であつた。

五月は、現代における革命の主題が、単に貧困であるよりもむしろ、決定権であることを明らかにした。それは、管理し操作する階級に対する、管理と操作とを拒否する人間たちの闘争であつた。その意味で五月は、単に資本主義に対するのみではなく、管理社会に対する闘争であり、管理社会に向けられた、先進工業国における、初めての、大規模な、公然たる反乱であつた。それ故に、五月は単に政治革命ではなく文化革命という性格を帯びたのであり、最も尖鋭的な闘争の中で目標は、単に経済的なものではなく、管理や操作を拒否し、自己の意志によって自分の生活を享受したい、という欲求の達成であつた。

この五月革命の基本的な性格が、五月革命全体に絶対自由主義的な性格を与えた。すなわち、根源的な急進性、平等主義、直接民主主義的な志向である。五月は、既成の組織ではなく、新たに組織された運動体によって推進されたが、ここでは、あらかじめ定められていた方向へと操作する指

導の意識は拒絶され、不断に活かされようとしたのは、大衆自身の自発的な意思であった。そこでは、徹底した自由な討論を基礎にして、直接民主主義的な運営が貫徹され、それ自身が自治管理的な社会運営を予告した。それらの運動体が、まだ漠然とだが未来に期待していたのは、本質的には自治管理社会であった。そこに私は、現代革命の主題、主体、行動の型態を見る。そして、それらについては、次章以下で論じてゆくことにしたい。

第二章 教育の告発と “学ぶ”ことの革命性

五月革命がパリ大学ナンテール分校に端を発していたことは、繰り返して言うまでもあるまい。そして、五月十日から十一日にかけての、いわゆるバリケードの夜を経過して、運動が労働者を含むフランスに波及するまでは、学生の動きだけに限られていたこともすでに書いた。その学生の運動は明らかに政治的なものであったが、しかし彼らの運動は、初めから純粹に政治的なものであったわけではない。それ以前に大学固有の問題、教育の問題に取組んでいた時期があった。そして、五月革命を推進した、いわゆる怒れる若者たちは、大学の告発、教育の告発を通じて、社会の全面的な告発という政治の領域へと入ってゆくのだが、ここではまず、どのような形で教育が問題とされたのか、それをみてゆくこととする。

五月革命に先立って、フランスの大学はどのような問題をかかえていたのか。大学はさまざまな批判を浴びていたが、それは二つの側からの批判に大別できる。第一は、大学が現代社会の要請に応えていないという、産業界、テクノクラートからの批判であり、第二は大学の階級的性格をつ